

小学生の読書が共感性に及ぼす影響と影響過程の検討

千田 沙紀

今日、子どもが読書をするに対しては社会的にさまざまな効果が期待されており、共感性に対しても読書の効果が期待されている。しかし、その効果を実証的に示した研究は少ない。共感性とは、Davis によると「他者の感情体験に対する反応性」であり、視点取得（他者の心理的視点を採用すること）、共感的関心（不運な他者への同情や関心という他者志向の気持ち）、個人的苦痛（緊張する対人的状況での個人的な不安や動機など自己志向の気持ち）、ファンタジー（本や映画や演劇の架空の人物の気持ちや行動のなかに自分自身が想像的に移行すること）から構成される。そこで本研究では、次の2点を検討することを目的とする。目的1では、児童の読書が児童の共感性に及ぼす影響について検討する。目的2では、児童の読書が児童の共感性に及ぼす影響過程における、アイデンティフィケーション（物語の登場人物のアイデンティティーを自分のものとして、登場人物と同じような感情になること）の媒介効果を検討する。

本研究の分析対象者は、調査1では3市町村3校の小学校5年生112名（男子41名、女子71名）、小学校6年生158名（男子73名、女子85名）、調査2では3市町村3校の小学校5年生119名（男子65名、女子54名）、小学校6年生150名（男子81名、女子69名）であった。

目的1については、小学校5、6年生を対象に、読書量（冊数、時間）、本の好き嫌い、他人と本の話をする頻度が共感性にどのような影響を及ぼすか、2時点での縦断調査及び重回帰モデルを用いた分析によって検討した。異なる読書状況の影響の安定性を検討するため、調査1は7月と11月に実施し、学校がある時期について主に尋ねた。調査2は9月と11月に実施し、1回目調査で学校がない時期について主に尋ねた。目的2については、目的1で影響が見られた場合に、読書がアイデンティフィケーションに影響を及ぼし、アイデンティフィケーションが共感性に影響を及ぼすかをさらに検討した。

本研究の主な結果は次の3点である。

第1に、調査1では読書量（冊数）、読書量（時間）、他人と本の話をする頻度が多いほど、あるいは読書が好きであるほど、共感性及び下位尺度である視点取得、共感的関心、ファンタジーが高まることが示された。第2に、調査2では学校がない日の読書量（時間）が多いほど、共感性の下位尺度である個人的苦痛が低まることを示された。第3に、調査1では読書量（冊数）、読書の好き嫌い、他人と本の話をする頻度が、共感性及び下位尺度である視点取得、共感的関心、ファンタジーに及ぼす影響過程における、アイデンティフィケーションの媒介効果が示された。なお、調査2では結果2で見られた影響の過程において、アイデンティフィケーションの媒介効果は見られなかった。

本研究では主に調査1で、読書が共感性及び下位尺度に及ぼす影響が部分的に見られた。また調査1のみで、その影響過程におけるアイデンティフィケーションの媒介効果が部分的に見られた。今後の課題として、より長い期間を設定した複数時点での調査によって、読書が共感性に及ぼす影響及び影響過程の安定性を検討していくこと、また読む本の内容や他人と本について話す内容等、質的な違いによる影響を検討していくことが望まれる。

（指導教員 鈴木佳苗）